

# アウグスティヌスにおける言葉の効用 (*utilitas verborum*) の問題

—— De Magistro, XI, 36 ~ XV, 46 ——

樋 笠 勝 士

## 序

アウグスティヌスの思想が一般に回心 (*conversio*) の哲学として特徴づけられることがある。それは、一言で言えばこの思想の主眼が、人間の外在的諸事物への傾向を自己の精神の内奥への志向に転換させることにあるからである。この外から内へという自己還帰の思想を支えているのは「外から勧め、内で教える (*foris admonet, inus docet*) 」という根本命題である。「外」とは感覚を介した物体的対象の把握の場であり、「内」とは精神による真理の把握の場である。そして、「勧める」とは物体的対象による精神の注意力の喚起であり、「教える」とは真理の照明による真なる事象の把握である。

処で、この勧め (*admonitio*) は次の二つの場合に大別され得る。一つは人工品や自然界等を対象とする場合、つまり物体の構造や形態など広く物理的現象自体を対象とする場合である。例えば、「これらのこと ( 身体の美など ) から何か不変なものを探求すべきであると勧められる」と述べられる所において、身体であれば内臓の秩序や肢体の対称性が、建築や音楽であればリズムや統一性が探求の対象として考えられている事を指摘できよう。もう一つは対話や読書の場合、つまり一般に言語現象を対象とする場合である。例えばプラトン派の書物を読ん

で「そこから非物体的な真理の探求を勧められた」と述べられる様に、文字や音節をもつ言葉の物理的統一性のみならず、通常は言表内容或いは意味内容の把握が言わばほとんど必然的に随伴する場合である。何れの場合においても対象自体は可視的物体や可聴的音響、つまり感覚によって把えられる物理的現象である。この点では共通しているが、前者は初期著作において特に多く語られ、他方後者は中期以降の著作において主題的に論じられていることもあって、取り上げられる対象の相違には、何かアウグスティヌスの「勧め」についての思想の根幹に関わる一種の分節点をみる事が出来ると予想されるのである。

さて、我々が本稿においてとりあげるテキスト『教師論 (De magistro)』は初期著作でありながら言語現象を対象とする考察を行い「言葉による勧め (admonitio verborum)」を示している点で、右の単純な分割に従う限り、初期と中期以降を結ぶものとして位置づけられる。もしそうであるならば、 $\wedge$  foris admonet, intus docet  $\vee$  という命題についても、中期以降の言語に関する思想の枢要な論点が、かかる命題の構成要因として『教師論』において先取され或いは暗示されていなければならない。この様な観点から、本稿においては、「言葉 (verba)」の状態について『教師論』が本来的には如何なる方位にあるかを、中期以降の言語に関する思想の端緒たるべきものを明らかにする事によって示そうと思う。

## 第一節 言葉の位置

### (一) 言葉の限界 (X, 36 ~ XII, 40)

『教師論』において言葉 (verba) は如何なる位置を占めるのであろうか。著作全体の構成は一見したところ、

記号としての言葉の伝達機能を検討する「記号論」から、記号の指し示す事物（res）の重要性の指摘を通じて、真の意味における伝達、即ち真理の伝達を主張する「内的教師論」へと転移している様に見える。この観点に立てば、言葉は有効な伝達機能をもつものと言うよりは寧ろ、伝達機能の可能性が極めて限られたものとして位置づけられることになる。果してそうであろうか。構成の推移に示される言葉の位置がそのまま言葉の実相なのであろうか。これを再検討するために、言葉の限界が指摘される著作の後半部を見ることにしよう。

第三二節に始まるアウグスティヌスの所謂 *oratio perpetua* において、彼は記号による学知（discere）を否定し事物による学知を指摘する。その後、言葉は次の様に明確に規定されている。「言葉はただ我々が事物を探索する様に勧めるのであり、我々がそれを知る様に示してくれるわけではありません。」<sup>4</sup>即ち、言葉は未知の事物への探求を喚起する機能をもつが、他方で事物自体の把握をもたらす力はない、という言葉の二面性が示されているのである。然し、この二面性は、論述の推移を見る限り二面性のままに提示されているというよりは寧ろ後者の面が強調される結果となっているのである。というのも、この著作の結論は、通常の意味における知識の移転としての教え（docere）を否定して、真の意味における教え（Docere）を提示することにあるからである。<sup>5</sup>例えば可感的対象（sensibilia）の場合においては、未知の事物がもし現前していればそれを知覚することにより学知が成立し、またそれが現前していなければ、既知の事物の時は記憶に刻まれた心象（imagines）により再認識が、そして未知の事物の時は信（crede）が生起し得る。<sup>6</sup>何れにしても言葉は知ることそのものには寄与しない。あくまでも知覚又はその記憶像が、言葉の聞き手の内に成立し存在していなければならぬのである。

また、知性的対象（intelligibilia）については次の様に述べられている。「我々が精神によって認識するもの、即ち知性や理性によって認識するものについて論議するときには、確かにかの真理の内なる光の中にあって見るその対象について語るのです。そしてこの光によって、内なる人と呼ばれる者が照らされ享受するのです。しか

しその時、我々の聞き手もまた自分の内奥の澄んだ目を以ってそれを見るならば、彼は私の語ったことを彼自身の観想によって知るのであって、私の言葉によって知るのではありません。」<sup>7)</sup>「ここにおいても対話において知性的対象についての言葉を聞き手が知る (nosce) 根拠は、言葉を媒介にした知識の移動にあるのではなく、専ら聞き手自身の内奥における真なる事象の把握にあるのである。

こうして何れの対象においても、言葉の聞き手自身における事象の把握が必要なために<sup>8)</sup>、対話における言葉は本来的には意義をもたぬものとして看做される。これを受けて、G. Madec が les vices du langage<sup>9)</sup> と呼ぶ如き様々の日常的事実が傍証的に列挙されることになる。即ち、知ることの根拠を明確にすることによって言葉の様態を規定するだけでなく、実際の対話の場に所在する様々な伝達上の障害を提示することによって更に言葉の限界を指摘しようとするのである。

## (二) 言葉による伝達の可能性 (XIII, 41~XV, 46)

論述は、言葉を不完全で欠陥多きものとしてより一層否定的に扱う方向へと進むが、実際の所は、言葉は如何なるものとして位置づけられているのであろうか。

実際の対話の場における伝達上の障害についてアウグスティヌスは先ず聞き手の立場における伝達の困難を語る。例えば、それは魂の死滅を信ずる人が自らの心 (animus) を隠して魂の不滅について語る場合である。この時、魂の不滅についての言葉を聞いて聞き手は「語り手が真実を語っていると判断する」<sup>10)</sup>ことになる。これは結局語り手の真意と語られた事との間の乖離を意味しており、原理的には嘘をつく人 (mentientes) や欺く人 (fallentes) と同じ部類に属している。ただしアウグスティヌスは、右の様な事態と共に心を露にするという事態をも

直ちにとりあげるのである。「勿論、真実を語る人の言葉が、その心が露になることに努めて、その事を言わば告白しようとしていることについては私は全く疑いません。」つまり、伝達上の障害を挙げながらも、言葉による真意の伝達の可能性は示されているのである。

次に語り手の立場における伝達の困難を見てみよう。それは、考えられた事柄 (*res quae cogitantur*) に適合する言葉を表現 (*profere*) し得ぬ場合である。例えば、それは「記憶に委ねられ、時々繰り返されている言葉が、それとは別の事を考えている人の口から出てくる場合で、その事は我々が讚美歌を歌うときにしばしばおこることです。或いはまた口がすべてある言葉が我々の意図に反して他の言葉の代りにとび出す場合」と述べられる場面である。これらは、何れも語り手の思考 (*cogitatio*) に適合せぬ言葉が、意志を他に向けたり不注意であることよって語り出されるという一種の事故の如きものであり、しかも「時々起こり……、起こった時も明らかに判る」のであるから、注意によつて未然に防いだり、事故後直ちに修正し得るものである。その意味では右の如き障害は重大な問題ではないといえよう。

他方、一般的な問題として論争を惹き起こしている事態も挙げられている。それは、「語り手は確かに自分の考えているものを指し示しているのですが、大抵の場合、自分や数人の人々だけに指し示しているにすぎず、自分が語っている相手にも他の誰にも同じ事柄を指し示していない場合」で、この事例としては「人間は *virtus* においてある獣に及ばない」という文章が挙げられている。この場合、語り手は嘘をついているわけでもなく、事故でそう語っているのでもなく、思考の対象としての事象 (*res*) について誤っているわけでもない。ただ彼は思考対象としての肉体的な力という事象を表現する時に *virtus* という語を採用しているにすぎないのである。これは明らかに誤。た有害な陳述 (*falsa pestifera sententia*) であるが、これについては「定義がこの様な誤りを救うことが出来ると言われている」として対策が示されているのである。ただしアウグスティヌスは定義の方法につい

ては何も語っていないし、またその方法も結局言葉の問題であるとして、積極的に評価し認めているわけでもない。<sup>16)</sup> 然し、伝達上の障害を語りながらも、定義による伝達の可能性については認めようとするのである。

この様に、知ることの根拠が示される場では探求の勧めに留ると規定された言葉の様態の叙述に続いて、更に言葉による伝達上の障害が語られているとしても、それは全くの否定や欠陥の指摘ではなく、また単なる限界の指摘に終るだけでなく、寧ろ反対に、言葉に対する肯定的視点、即ち伝達の可能性が抑制的に示されているとし得るのである。それ故、様々な伝達上の障害が叙述されたのは、真理の伝達の本来の優位を強調するためであり、また、言葉に対する肯定的視点が示唆されたのも、言葉を正當に位置づけようとする意図があったためであると看做されよう。それはアウグスティヌスが『教師論』の最後の箇所ですべて述べていることから明らかである。「しかし、正しく考察すれば、決して小さいとはいえない言葉の効用全体については、もし神が許したもうならば、我々は他の機会に探求することにしよう。<sup>18)</sup>」

言葉による伝達の可能性を否定的に扱い、真理の伝達を結論として明示する箇所において敢えて言葉の効用ではないことは明らかであるとしても、何故他の機会に考察する必要性をこの場で問題提起するのであろうか。「小さくない (non parva est)」と見るのは何故であらうか。また、それが『教師論』の場で扱われる主要問題ではなから考へあわせると、言葉の効用の問題は、唯一の教師のみが教えるという『教師論』の主題のために敢えて主たる考察の対象から除外された、或いはアデオダートゥスに対する説得上の理由により言葉のもつ意義が意図的に眨められたとし得るのである。少なくともアウグスティヌスが結論的論述の場で言葉の意義をより正確に位置づけようと企図していたことは明らかである。そして言葉の効用も彼にとつては依然として重要な問題であり、それが実際の対話における言葉の位置をめぐって考えられていたことも確かなのである。

## 第二節 〈per homines〉の伝達

### (一) 『キリスト教の教え』序文において<sup>19)</sup>

周知の様にアウグスティヌスの中期著作『キリスト教の教え』は「神から与えられたしるし (signa divinitus data)」<sup>20)</sup>としての聖書の解釈をめぐって、知解されるべきものを発見する方法と知解されたものを表明する方法を論ずることを目的としている。このため序文は聖書解釈の方法をたてることの意義を語る内容になっている。そこにおいてアウグスティヌスは三種の論敵を予想する。第一は聖書解釈の規則 (praecipua) を理解せぬ人、第二は規則を理解できてもそれをテクストに適用できぬ人、第三は規則は不要であり神の賜 (divinum munus) によって聖書の謎 (obscuritas) を明らかに出来ると考える人、である。<sup>21)</sup> 第一と第二の人の場合については、規則をとらえる「目の視力 (acies oculorum)」<sup>22)</sup>即ち理解力に問題があるのだから、これからたてる規則に異議を唱えることは出来ない、とされる。<sup>23)</sup> 問題は第三の人の場合である。これについては、アウグスティヌスは直ちに論破しようとはせずに、寧ろ神の賜による解釈の可能性を十分認めようとする。<sup>24)</sup> なぜなら「実際、我々にとって重要な事柄は、人間の導きによらずに聖書を知ることによるこぶキリスト者にあるから」<sup>25)</sup>である。然し、アウグスティヌスは他者の導きを必要とせぬ第三の人もキリスト者と同様に幼少の時期に言葉を他者から学んでいる事実を指摘する。また、「神の賜」による知解を得たキリスト者、即ち真理の伝達を受けた者がそれに留らずに、かえって言葉を用いて他者へと向う事実をも指摘する。例えば、預言の書を既に知解していたピリポが他者に向かって「人間の言葉と口舌によつて (humanis verbis et lingua)」<sup>26)</sup>聖書を説いた事例が挙げられている。同様に、アウグスティヌスは「神の賜」による知解を得た第三の人でさえも言葉を使用して他者への伝達に着手することを指摘

する。「しかし如何なる他人の説明にもよらずに読み且つ知解していながら、なぜ彼は他の人々に説明しようとするのでしょうか。なぜ彼は、他の人々が人を通じてではなく神が内奥で教えることによって知解するように彼らを神のもとへ送りこまないのでしょうか。」<sup>27</sup>ここで明らかな様に、真理の伝達（*in us docere*）という形式については『教師論』と同様で変更はないが、主張の力点はそれではなく人を通じて（*per homines*）伝達にある。それ故、第三の人に対しては次の様に述べられることになる。「むしろ人を通じて学ばねばならないということを、傲慢なくして学ばねばなりません。そして人を通じて教えられた人は自分が受けとったことを傲慢や嫉妬なくして伝えねばなりません。」<sup>28</sup>ここで注目すべきなのは、*per homines* の伝達としての *trudere - accipere* がとるべき行為として設定されている点である。それは、欺かれて誤謬に陥り、共同体における読解の場を拒む事態を防止するためであると共に、また自己が知解した真なる事象を他者に開陳することが知解した者の使命となるからである。後者については、*per homines* の伝達が「傲慢や嫉妬なしに」という条件を伴っている点と関係している。それは、真理の伝達を得ながらも他者へと向かい真なる事象を専有しないキリスト者を典型とする「知解した者」の精神の態度の問題である。これについては「どんなものでも——恐らくは偽なるものを除いて——誰も自分自身のものであるとして考へてはなりません。というのは、すべての真なることは『我は真理なり』と言われるあなたの方から由来するのですから。」<sup>29</sup>と述べられている。即ち、「知解した者」は真理の伝達を通じて、自らが知解した真なる事象の淵源を自覚することになるのである。こうして究極的には真理を開示する場となり得る共同体における相互伝達の意義は次の様に纏められる。「神が人を通じて自らの言葉を人に伝えることを望まないとしたら、人の地位はおとしめられていたことでしょうか。……慈愛そのものは人々を互いに合一という結び目で結んでいますが、それは、もし人が人を通じて互いに何も学ばないとしたら、魂に注いで言わば互いにまぜあわせるための方途をもたないことになるでしょう。」<sup>31</sup>「そもそも、真理は知解能力の優れた言わば特権的な人間のみによって



自律的に扱えられるだけに終わるのではなく、その人間を介して他者にも伝達され得る事が聖書解釈の規則をたてる前提となっているのである。<sup>32)</sup>

## (二) 『教師論』において

我々は第一節において、真理の伝達を語る結論的部分においては、言葉に対する肯定的視点が抑制的に示され、それが実際の対話の場をめぐって考えられていたことを指摘した。然し、これを『キリスト教の教え』序文にみられる如き積極的な他者伝達の可能性を開く素型とみることは可能であるとしても、それは直接結びつくことが出来る様な要因を備えたものではなかった。それ故、ここでは『キリスト教の教え』序文に結びつく要因となり得るものが『教師論』に所在するか否かを検討することにしよう。

さて、アウグスティヌスは『教師論』の結論として真理の伝達を次の様に述べている。

Quid sit autem 'in caelis', docebit ipse, a quo etiam per homines signis admonemur foris, ut ad eum intro  
conversi erudiamur. (*De mag.*, XIV, 16)

「『天にまします』が何を意味するかは、かの唯一の教師自らが教えるでしょう。内奥において御自身に向けて我々が回心する様導くために、唯一の教師は人を通じてしるしによって外から勧め促すのです。」

『教師論』の後半第十一章以降には、言葉の機能を *docere* ではなく *admonere* として規定するテキストがいくつか見受けられるが、<sup>33)</sup> 右のテキストは他と違って、『キリスト教の教え』序文に直接結びつくものであると考

えられる。その根拠は次の二点にある。

先ず第一に、主に用語上の問題として、言葉による勧めの働きにおいて特に *per homines signis* √ という位置づけをしている点である。勿論、それぞれ単に言葉の使用者と言葉の機能としての記号性を分析的に表現したとも考えられるが、単純に他のテキストと全く同じ資格をもつと言うことは出来ない。というのも、右のテキストは言葉の効用について問題提起した直後に所在し、更にはアウグスティヌス自身による、真理の伝達と勧めについての最終的な規定でもあるからである。それ故、右の規定は『教師論』における言葉の結論的な位置づけであると看做されるべきであろう。この見方に立って検討すると、先ず *per homines* √ については、この著作中唯一の表現が結論的規定に採用されている事、そして言葉に対する肯定的視点を示す文脈がある事から、第十一章三六節に始まる真理の伝達の論旨に対して新たに言葉そのものからそれに優る言葉の使用としての「人」への視点の転換、即ち勧めではない (tantum) 言葉からそれを勧めの手段として言表する他者の存在への視点の転換が示されていると言えよう。<sup>36)</sup> 『キリスト教の教え』序文の主旨は、言葉を発し聞きとる他者の意義を強調することであつたのだからこの点で同一の方位にあるとみてよいであろう。従つて、*signis* √ については、言表主体としての人が関わる言葉の機能が、著作前半の「記号論」の論旨に遡及して明確に規定されていることになる。もとより *verba* と *signa* は同義ではなく、また常に置換できるわけでもなかった。例えば *signa* は常に「*aliquid* を指し示すすべての記号 (W. 9) 」として考えられるのに対し、*verba* は「有節音声によって発音された記号 (W. 20) 」としても考えられることがあつた。ここでは言葉を事象への指示 (*significare*) の機能が常に妥当する *signa* として原理的に表わすことによつて、事象に接近する手段となる言葉の位置が示されているのである。以上の第一点は次の第二点と密接な関係をもっている。それは聖書解釈への方位が示されている点である。と

いうのも、*quid sit "in caelis"* という問は、勧めを生起せしめる言葉が、通常の言語活動における言葉に留らず

に、*signa divinius data*としての聖書の言葉をもその射程においていることを意味するからである。この間の直前でアウグスティヌスは「天の唯一の教師（マタイ第二三章第八節、第十節）」について次の様に言う。「神聖な権威によって如何に真正に書き記されているかを、今や我々は信ずるだけでなく知解し始めています」<sup>87</sup>まさにこの知解（*intellegere*）の始点において人間の言語の位置、即ち *per homines, signis*  $\vee$  が明らかにされたのである。つまり、解釈という行為は何のために、誰のために、如何なる仕方で行なわれねばならないかが問題として浮上して来たのであって、*per homines, signis*  $\vee$  はそれに答えようとするものである。従って、『キリスト教の教え』序文の主旨と同様に *per homines*  $\vee$  は真なる事象を相互伝達する共同体の意義を示唆し、また *signis*  $\vee$  は、言語の典型としての *signa divinius data* に集束するものをも予示している、とし得るのである。<sup>88</sup>

この様に『教師論』における結論的論述は中期以降の言語論における主要な論点を含みもっているのである。

### 第三節 言葉の効用

#### (一) 思考の伝達

我々は *per homines*  $\vee$  の伝達が聖書解釈を射程においていることを示した。処でこの聖書解釈は記号の指示する意味の単なる約定的諒解ではなく、真なる事象の知解でなければならぬ。それならば *per homines*  $\vee$  の伝達は真なる事象の把握である「真理の伝達」と如何なる連関を有しているのであろうか。

そこで、先ず『教師論』においてアウグスティヌスが人間の相互伝達一般を規定する箇所を見ることにしよう。

既に述べた様に、実際の対話における伝達上の障害を語る著作後半部において様々の困難が語られるが、結局彼は次の様に明言する。「しかし見なさい。私はもはやあれこれ言わずに次の事を受け入れます。つまり、知っている言葉が人の聴覚に受け取られた時、受け取った人は、語っている人がその言葉の指し示している事柄について考えていたということを知ることが出来るのです。しかし、だからといって彼はその人が真実を語ったかどうかということまでも学ぶのでしょうか。今はこのことが問われているのです。」<sup>39</sup>ここでは伝達の基本型が二つに明確に区別して述べられている。それは、対話において相手の思考——*cogitare de rebus*——を知る場合と、相手の言葉の真実性——*vera dicere*——を知る場合である。アウグスティヌスが主題とし問題とするのは後者、即ち真理の伝達の場合である。この伝達が生起する迄のプロセスは、人間の教師の教示を受ける人間の学徒を典型例とする様に、先ず「真実が語られたかどうかを勿論あの内なる真理を自らの力に依じて眺めながら自己自身の中で考察し」、そして「真実が語られていることを内奥において発見する」となる。<sup>40</sup>つまり $\wedge$  *considerare et inueniri*  $\rightarrow$  *invenire*  $\vee$  という経緯を辿る。これは各自の精神の力に依じて (*pro viribus*) ではあるが、真理を志向する運動——*quaerere veritatem*——から真理の伝達——*intus docere*——へのプロセスである。学徒の場合、先ず各自の理解力に従って真実性をめぐる検証を試み、言表の妥当性を検討する。そして最終的には真理に基づく判断が対象に下される。それ故、この学徒は言表そのものを判断する者 (*index ipsius locutionis*) の地位にあるのである。ここで注目すべきなのは、対象はあくまで言表そのものであって言表する者ではないという点である。例えば魂の死滅を信ずる者が魂の不死の理論を語る場合でも、語る者の真意や心中がどの様であれ、彼の発した言表自体が判断対象となる。<sup>41</sup>この様に、真理の伝達が問題となる場では、語る者としての他者存在への関心は無く、伝達においては専ら言葉についての垂直的な真判断が遂行されるのである。

これに対して、問題として扱われないながらも明白に認められた思考の伝達とは如何なるものであろうか。一

見たところそれは言語一般の約定的な様態を迫認したにすぎない様にもみえる。然し『教師論』において批判された言語一般に対する観方とは知識の客観的移転として考えられた *locus* に基づくものであった。勿論、既知の言葉を対象としている以上言語の約定性に存することは明らかであるし、また外化された言葉が聞き手にとっての手懸りである以上語り手の真意と言葉の指示する思考内容が一致するか否かについても依然として不明のままである。その意味では言語一般の約定的性質がより正確に語られたとみることも出来よう。何れにしてもアウグスティヌスが明らかにしていることは、真理の伝達の場合では語る者の真意や思考或いはより広く「心」が全く問題とならないのに対して、思考の伝達の場合では、少なくとも語る者の思考ないし思考内容を言葉の指示作用に従って然々のものとして措定しようということである。しかも真意が問題となる様な魂の死滅を信ずる人や嘘をつく人、欺く人でさえも、思考の伝達という点で見れば、自己の思考内容を言葉に表わしているといえるのである。これをアウグスティヌスは表現上の事故がない場合を前提しつつ次の様に言う。「実際、嘘をつく人ですえも自分の語り出す事柄について考えており、その故にたとえ我々が、彼らが真実を語っているかどうかは知らないとしても、彼らの語ることが心の中にあるということを知るのである。<sup>42</sup>」つまり、如何なる人であれ「何か」を語る場合、真意とは無関係にその「何か」についての思考が既に心の中に所在するということであり、言わば言語に対する基本的な観方が示されていると言えよう。

処でこの思考の伝達については、アウグスティヌスにおける意味論が  $\wedge$  *signum* — *res*  $\vee$  の二項関係に基づくところ *Duchrow* に対して、既に *Markus* や *Jackson* が  $\wedge$  *signum* — *res* — *cogitatio*  $\vee$  の三項関係に基づくところと正當に指摘していることを付言しておかねばならない。<sup>43</sup> 『教師論』においては、例えば著作冒頭からアウグスティヌスが *implicit* な仕方で思考の領域或いはより広く精神の領域について語っていることを指摘できよう。例えば *is* という言葉について  $\wedge$  *signum* — *res*  $\vee$  の一義的固定的指示関係を断って、その言葉の所謂「意味」の場として

*animus* を呈示していること (II, 3)、記号が記号を指示する場面では、例えば *verbum* と *nomen* という語の包摂ないし合同関係についても実は各語が場合に依じて指示する意味領域に基づいて決定されていること (N, 9 ff)、記号が事物を指示する場面では指示対象として *res* ではなく敢えて *significabilia* を設定していること (II, 22)、事物と記号の価値差を問題にする場面では両者の間に *cognitio rerum* を置くこと (X, 26ff)、など「記号論」の各場面には精神の内に生ずる「意味」に相当するものを示す箇所がある。この様な「記号論」における「意味」の位置づけは著作末尾における思考の伝達の論述を準備するものに他ならない。

こうして、語り手は約定的な語義に注意して自らの思考に相応しい言葉を使用する努力をする限り、言葉は語り手の内にある事物についての思考を反映していると言ってよいであろうし、また、聞き手は言葉の約定的な指示作用に基づいて再構成された思考内容を語り手固有のものとして措定することになる。この様に、言語使用の場においては  $\wedge$  *signum* — *res* — *cognitio*  $\vee$  の三項関係に基づく言語構造を前提とするので、アウグスティヌスが問題として掲げた「言葉の効用」が妥当する  $\wedge$  *per homines*  $\vee$  の伝達もかかる構造に基づくことになるのである。

## (二) 真理を志向する対話

言語使用一般における言葉が効用をもつとするならばそれは如何なる場面においてであろうか。既に述べた様に、勧め (*admonitio*) における効用は真理の探求をもたらす限りでのことであるから、言語使用一般における思考の伝達もその局面に限定されなければ効用をもつとはいえない。それでは、言語使用の場における思考の伝達は如何にして  $\wedge$  *per homines*  $\vee$  の伝達として聖書解釈への方位をとって真理を志向し得ることになるのである

うか。これを直接的に叙述し説明する箇所は『教師論』の中にはない。然し、対話の推移自体にそれを示唆するものがある様に思われる。というのも、『教師論』の対話の目的は「語るべきとき、我々は何が起こることを望むか」という問を解明することであり、そしてその答はさしあたり、対話の相手の精神の内奥において真理の照明を生ぜしめそれを自覚させることである、とすることが出来るからである。つまり、『教師論』における対話自体がかかる答を生み出したとし得るのである。この事は、アウグスティヌスが対話の冒頭で「以下の対話の中で事実そのものが明らかにしてくれるだろう」と述べ、またアデオダートゥスが対話の最後でアウグスティヌスの発言を指して「あなたの言葉の勧め」と述べていることと符合している。それ故、効用をもつ思考の伝達とは、『教師論』の結論である「内奥において真なる教師のみが教える」という事象を対話の相手の内奥で真理の伝達が生起することを通じて知らしめるために限定的に方向づけられた伝達でなければならないのである。<sup>47</sup>

それではかかる伝達は如何なる仕方で開催されているのであろうか。実際の対話の詳細な検討は別の機会に譲るとして、ここではアウグスティヌスが対話について叙述する箇所を見ることにしよう。彼は言う。「何か質問された時それを否定しても、更に他の質問が重ねられることによってそれを認める様に導かれる、ということがしばしば起こるのですが、これは事柄全体についてあの光に相談することが出来ない人の視力の弱さによって起こるのです。その人はその全体を見ることが出来なかったのですが、全体を構成している諸部分について質問される時に諸部分によって認めてゆく様に勧め促されるのです。<sup>48</sup>この事柄全体 (res tota) とは『教師論』の著作全体においてはまさに「真理の伝達」という事象であり、アウグスティヌスはこれについての思考を対話によって実践的にアデオダートゥスに伝達しているのである。そしてその伝達は *interrogare* — *respondere* によって遂行され、事象全体を真なる事象として把握している側 (アウグスティヌス) が基本的に質問者の役割を受けもつ。質問者は応答者の精神の視力に応じて部分的問題から質問し始め、「注意を促すことのできる記号を送る」<sup>49</sup>

それは応答者が「自ら発見するため」<sup>50</sup>であって「内的に学ぶのに相応しい」<sup>51</sup>仕方でなければならぬ。こうして質問と応答の往復において応答者の内には伝達内容についての判断が適時生起する。これを質問者が確認するために自分の指示する事象と同じ事象について相手が言表する様に求めて質問すればよい。その結果、応答者が「質問された時、語られた事と同じことを答えることが出来た者」<sup>52</sup>となればよいのである。勿論、この場合の事象の同一（idem）を保証するのは、応答者の言表から再構成された思考内容と自らの思考内容との間の同一性についての判断である。例えばアウグスティヌスはアデオダートゥスに対して敢えて対話の内容を要約させているが（Ⅴ、19-20；ⅩⅦ、46）、「この時アウグスティヌスは事象についての思考の同一性の確認を意図していると考えられよう。斯くして応答者が最終的に事象全体を把えた時、両者共にそれを同じ真なる事象として同じ真理の光の内に観ているのであるから、言わば真理の共有経験とも言うべき段階に至っていると言えるであろう。これこそ  $\wedge$  per homines  $\vee$  の伝達が目的とするものなのである。

この様に  $\wedge$  per homines  $\vee$  の伝達は真理の伝達を根拠とすることによって思考の伝達一般と区別されることになる。それ故、伝達される思考内容も、それが事象全体を構成する部分命題についての固有の思考であるとしても、真理に即してそこへと方向づけられる限りは正しい思考であると言えよう。しかもそれはアデオダートゥスの抵抗や反論に対応する調整力を持ち無理なく真理の伝達へと導くものでなくてはならない。そのためには各段階の思考内容に対して、それに相応しい分節音（articulata vox）を選択して適用してゆく必要がある。これらの操作によって外化された言葉は、質問者側にとっては、自己に生じた真認識を他者にも生起させるための効力ある道具となり、他方応答者側にとっては、まさに真認識にとって有効な成立契機となる。言葉の使用者としての「人」という観点からみれば、「応答者にとって真なる事象全体を把えている質問者という他者は、真理を志向する限り必要不可欠な存在であるし、また質問者にとって応答者という他者は、自己の既知の真なる事象を専有せ



ず「傲慢や嫉妬なしに」伝達するために必要不可欠な存在なのである。この意味で『教師論』は「言葉による導き（*verbis perducere*, XII, 40）」としての「*per homines*」の伝達の意義をその根底に有しているとみなければならぬであろう。

## 結 語

『教師論』の著作の目的がマタイ第二三章第八節〜第十節についての解釈であるならば、まさしく対話という方法は「真理の伝達」を知解するのに相応しい手段になる。対話は、言葉が既に一般的に教育手段として使用され流通している現状、つまり根源的な目的性を欠いた言葉の現状から出発し、言葉による伝達の可能性を検討する記号論を介して、真理の伝達を明確に位置づけるに至る。その後、明言された「言葉の効用」とは、明らかに根源的な目的へと定められた言葉の使用を肯定的に位置づけようとするものである。この様な効用ある言葉は、根源から発する真なる事象を敢えて言表主体を通じて外在化させ、他者に対して同じ根源へと向かわしめる力をもつものである。それは、言わば応答の典型となる聖書解釈が単に他者から孤立した個的精神の営為のみならず、共同体において真理の共有をめざす行為でもあることを意味している。また一方ではアウグスティヌスの一連の解釈書が他者に向けての講解（*enarratio*, *tractatus*）であったことを考えあわせれば、『教師論』の対話という方法には単なる形式以上のものがあると言わなければならないであろう。確かに表面的には人間相互の伝達の価値が低く見積もられている様にみえるが、それは知識の教育に対する皮相的な観方を批判するためであって本来の目的ではない。寧ろ我々は著作の大半が伝達に関わる記号の研究から成ることを把え直して、言葉の積極的な意義を認めるべきではないだろうか。<sup>24)</sup>

- ① Augustinus, *De vera religione*, COSL XXXI, Belgique, 1962, XL, 75.…… et ex his admoneamur incommutabile aliquid esse quaerendum.
- ② Augustinus, *Confessiones*, COSL XXXVI, Belgique, 1981, VI, 20, 26.…… inde admonitus quaerere incorporam veritatem.
- ③ この分け方は便宜的なものにすぎない。初期著作とは、対象を教的なものに還元する思想をもつ『秩序論』『音楽論』『真の宗教』『自由意志論』等であり、中期以降の著作とは、言語論乃至記号論を扱う『キリスト教の教え』『三位一体論』『初心者への教導』等である。
- ④ Augustinus, *De magistro*, COSL XXIX, Belgique, 1970, XI, 36. (verba) admonent tantum, ut quaeramus res, non exhibent ut norimus.
- ⑤ docere と Docere の対立図式は、加藤武「mit-teien としての伝達 — De Doctrina Christiana に於ける docere の構造 —」(立教大学研究報告〈人文科学〉第四五号、一九八六年)に基づく。
- ⑥ Augustinus, *De magistro*, XXII, 39.
- ⑦ *ibid.*, XII, 40. Cum vero de his agitur, quae mente conspicimus, id est intellectui atque ratione, ea quidem loquimur, quae praesentia contuemur in illa interiore luce Veritatis, qua ipse qui dicitur homo interior illustratur et fruitor; sed tum quoque noster auditor, si et ipse illo secreto ac simplici oculo vidit, novit quod dico sua contemplatione, non verbis meis.
- ⑧ 一般に『教師論』においては認識の個人性・閉鎖性や言葉自体の不完全性から、対話は対話者相互の力動的な探求活動ではなく「聞き手」中心の活動であると考えられる。[Marc Baratin et Françoise Desbordes, *Sémiologie et métalinguistique chez Saint Augustin, Langage*, vol. 65, 1982 は対話について「その重点は聞き手におかれる。即ち解釈だ、或いは少なくとも語り手が世界について語ることを解釈する可能性に置かれる(p.82)』と述べている。また、R. A. Markus, *St.*

Augustine on signs, *Phronesis*, 2, 1957, 2 『教師論』の「解釈者」の理論による指摘について。 (*Augustine, A Collection of Critical Essays*, New York, 1972, p. 81)

⑥ *Œuvres de Saint Augustin*, M, Paris, 1976, p. 145.

⑩ *De mag.*, XIII, 41. *iudicat iste vera eum dicere.*

⑪ *ibid.*, XIII, 42. *Nam nullo modo ambigo id conari verba veracium et id quodam modo profiteri, ut animus loquentis adpareat.*

⑫ *ibid.*, XIII, 42. *cum aut sermo memoriae mandatus et saepe decursus alia cogitantis ore funditur, quod nobis cum hymnum canimus saepe contingit, aut cum alia pro aliis verba praeter voluntatem nostram linguae ipsius errore prosiliunt;*

⑬ *ibid.*, XIII, 42. *interdum accidere ..... cum accidit apparere.*

⑭ *ibid.*, XIII, 43. *cum ille qui loquitur eadem quidem significat quae cogitat, sed plerumque tantum sibi et aliis quibusdam, ei vero cui loquitur et item aliis nonnullis non idem significat.*

⑮ *ibid.*, XIII, 43. *Huic errori definitiones mederi posse dicunt.*

⑯ アウグスティヌスは定義について積極的にその意義を評価してはいない。結局の所、①論争対立は事物(*res*)についてではなく言葉について生起する点、②**bonus definitio**がほんの僅かしかない点、③**disciplina definiendi**についての論争もある点を示している。この場で取り扱うことは適当ではないとしている。

⑰ 註④参照。tantum は言葉による admonere の面について否定的視点をあてている点を表わしている。

⑱ *De mag.*, XV, 46. *Sed de tota utilitate verborum, quae, si bene considerentur, non parva est, alias, si Deus siverit, requiremus.*

⑳ この「言葉の効用」は実際の対話の場における言葉の役割を肯定的に表わすものであると考える。「他の機会」については Markus (*op. cit.*, p. 73) は『キリスト教の教え』第二巻く第四巻を挙げ、加藤武(「アウグスティヌスにおけるヘルソーナと解釈」立教大学研究報告「人文」第四一号、一九八二年)は、それに先立つものとして『創世記註解——マニ教徒を論駁する(De Genesi contra Manichaeos)』を挙げている。

- 19 「序文」については加藤武論文(前註)に多くを学んだ。尚、「序文」の執筆年代については様々の論争があるが、本稿においては中期以降の言語論における特質としての「per homines」の伝達に焦点を絞るので問題にしない。
- 20 Augustinus, *De doctrina christiana*, CCL. XXXII, Belgique, 1972, II, 2, 3.
- 21 *ibid.*, I.1.1, Duae sunt res, quibus nititur omnis tractatio scripturarum, modus inventendi, quae intelligenda sunt, et modus preferendi, quae intellecta sunt.
- 22 *ibid.*, pro. 2.
- 23 *ibid.*, pro. 3.
- 24 事例として、文字の知識なしに聞くだけで聖書を記憶し思慮深い考察によって知解したと伝えられるエジプト僧アントニウス<sup>24</sup>、文言の故に神に祈り三日後に本を誦むことが出来たと伝えられる奴隸が挙げられている。
- E. Kevane, Paideia and Anti-Paideia: 'The Prooemium of St. Augustine's *De Doctrina Christiana*, *Augustinian Studies*, vol. 1, 1970 45-71 の第三の人々の知解のあり方を通常の人間教育の手続きとしての paideia と區別して a charismatic process of some kind (p. 163) と称している。
- 25 *De doct. christ.*, pro. 5. Certe enim quoniam Christianis nobis res est, qui se Scripturas sanctas sine duce homine gaudent nosse.
- 26 *ibid.*, pro. 7.
- 27 *ibid.*, pro. 8. sed cum legit, et nullo sibi hominum exponente intelligit, cur ipse aliis affectat exponere, ac non potius eos remittit Deo, ut ipsi quoque non per hominem, sed illo intus docente intelligant?
- 28 *ibid.*, pro. 5. Imo vero et quod per hominem discendum est, sine superbia discat; et per quem docetur alius, sine superbia et sine invidia tradat quod accepit;
- 29 *ibid.*, pro. 5.
- 30 *ibid.*, pro. 8. Quamquam nemo debet aliquid sic habere quasi suum proprium, nisi forte mendacium. Nam omne verum ab illo est, qui ait: Ego sum veritas.
- 31 *ibid.*, pro. 6. sed abiecta esset humana condicio, si per homines hominibus deus verbum suum ministrare

molle videretur. ....

ipsa charitas, quae sibi invicem homines nodo unitatis astringit, non habet adium refundendorum et quasi miscendorum sibi met animorum, si homines per homines nihil discerent.

- 32 加藤武前掲論文(註18)「人間を媒介とする(per homines)神の言(verbum Dei)の伝達(これが人間の品格(condicio humana)を保証するために神がわざわざとられた迂路、愛故の迂曲であるというのである)」(十一頁)と述べられてゐる。

33 註4参照。他に consilere との関係を示す XI, 38 のテクストが挙げられる。

34 註18参照。

35 言葉の使用と言葉そのものとは優劣差を以て明確に区別される。(cf. *De mag.*, IX, 26)

36 テクスト上の表現としては、人間の教師を qui admonuit たり、その行為を admonitio sermocinantis とする箇所(XV, 45)が挙げられるであろう。

37 *De mag.*, XV, 46. ut iam non crederemus tantum, sed etiam intellegere inciperemus, quam vere scriptum sit auctoritate divina.

38 『キリスト教の教え』序文と『教師論』を結びつける接点として更に次の二点を準ずるものとして挙げておこう。一つは〈per homines〉の伝達の用語としての〈trudere - accipere〉が『教師論』にも見い出される点である。明確な術語ではなくまた安定した対語でもないが、その意味は人間の相互伝達である。例えば実際の対話を語る文脈では XV, 45 (trudere)・ XIII, 44; 45 (accipere) が挙げられる。特に後者は頻出する(例えば III, 22 など)。もう一つは、真理の伝達を得た者が他者への伝達に着手する点である。これについては事例を指摘することしか出来ない。例えば冒頭において、自分の心の内を示すことによって他者を神へと向かわしめる司祭の例(1, 2)や、後半部において、嘘をつく人の対極に立つ真実を語る者の例(註11参照)が挙げられる。

39 *De mag.*, XIII, 45. Sed ecce iam remitto atque concedo, cum verba eius audiū, cui nota sunt, accepta fuerint, posse illi esse notum de his rebus quas significant loquentem cogitavisse; num ideo etiam, quod nunc quaeritur, utrum vera dixerit, discit?

- ④① *ibid.*, XV, 45.
- ④② 註10参照。アウグスティヌスが *index loquentis* をわざわざ *index locutionis* へと言い直している点に注目されたい。「人」は判断対象とはならないのである。判断対象は判断主体より劣位にある可变的音響現象(言表)であり、この事は『真の宗教』において明確に規定されている。「判断」については拙稿「アウグスティヌスにおける判断の構造」(東京大学文学部美学芸術学研究紀要「研究」第四号、一九八五年)を参照されたい。尚、*indicare* と *docere* との関係については別の機会に考へることにした。
- ④③ *De mag.*, XIII, 42. *Nam mentientes quidem cogitant etiam de his rebus, quas loquuntur, ut tamen si nesci-  
amus an verum dicant, sciamus tamen eos in animo habere quod dicunt.*  
B. D. Jackson. *The Theory of Signs in St. Augustine's De doctrina christiana. A Collection of Critical  
Essays*, 1972, pp.107. アウグスティヌスの真作と言われる *De dialectica* では、*cogitatio* に相当するものとして *dicibile* が挙げられているが、これは主要な言語論を含み、著作には現われぬ術語である上、*De dialectica* の著作自体が教則的色彩が濃いので採らない。他方中期以降の著作では *cogitatio* が術語として定立している。例えば『三位一体論』第十五巻第十章・第十一章、『キリスト教の教え』第一巻第十三章等が挙げられる。
- ④④ *De mag.*, I, 1. *Quid tibi videmur efficere velle, cum loquimur.*
- ④⑤ *ibid.*, I, 1. *quod in hac nostra sermoneatione res ipsa indicabit.*
- ④⑥ *ibid.*, XV, 46. *Ego vero didici admonitione verborum tuorum.* アウグスティヌスはアデオダトッスのこの返答に先立って、議論全体を反省し、個々の事柄について答えたアデオダトッスが実は知識を自己の内得ていた事を指摘しつつ、その淵源にさぐって — a quo ista didiceris — 自覚を促している。
- ④⑦ 『教師論』の対話の推移自体が *self-reflexive* であり、照明の必然性・可能性を示そうとするものである、という観方は、既に A. K. Clark, *Unity and method in Augustine's "De Magistro" (Augustinian Studies, vol. 8, 1977, p. 10)* に見受けられる。では「対話」とは何なるものであるのか。『教師論』は一連のカンキプム対話篇と同様に *exercitatio animi* (cf. *De mag.*, Ⅷ, 21) とした議論を含む形式をとっている。そしてその議論の展開は直線的でも *deductive* ではなく、むしろ (A. K. Clark, *op. cit.*, p. 10) 議論の展開の分析を以て提示することは出来ないが、さしあたり明らか

な事実は『教師論』が loqui の問題について loqui という方法によって論述してゐるといふことである。この点で他の対話篇と区別することが可能にならう。

問題と方法の一致については P. H. Baker, *Liberal Arts as philosophical liberation* : St. Augustine's *De Magistro* (*Actes du quatrième congrès international de philosophie médiévale*, Montréal, 1969) を同様じ『教師論』や dialectical exposition of dialectic (p. 473) と書いてある。彼は『教師論』が、『キリストと教の教え』第四卷(XX, 44)で事例として挙げられた『ガリテウス書』と同様に subdued style で書かれてゐるとする。即ち、反論を検証する忍耐が求められ、鋭敏な精神の理解力が必要な議論が扱われ、知るべき事を知らぬ者を相手として、明晰や (perspicuitas) が特質となる如き論述のあり方である (pp. 470)。

- ⑭ *De mag.*, XII, 40. Nam quod saepe contingit, ut interrogatus aliquid neget atque ad id fatendum aliis interrogationibus urgeatur, fit hoc imbecillitate cernentis, qui de re tota illam lucem consulere non potest ; quod ut partibus faciat, admonetur, cum de istis partibus interrogatur, quibus illa summa constat, quam totam cernere non valebat.

⑮ *ibid.*, N, 7. signa dando, per quae animadverti queant.

⑯ *ibid.*, VIII, 22. ut ipse invenias.

⑰ *ibid.*, XII, 40. (quomodo ille, a quo quaeritur,) intus discere idoneus.

⑱ *ibid.*, XII, 40. qui posset interrogatus eadem respondere, quae dicta sunt.

この箇所におおつて呈示された ① 真偽不明 ② 偽の知 ③ 真の知はそれぞれ ④ credere, opinari, dubitare ⑤ adversari, renuere ⑥ adtestari と対応し、またそれぞれ ① qui rem nescit ② qui se falsa novit ③ (右の引用文) と対応してゐる。

⑲ cf. *Retractationes*, I, 112.

⑳ cf. G. Madec, *op. cit.*, introduction, p. 33. Le *De Magistro* n'est pas un *dialogue* sur l'impossibilité du dialogue, pas plus que sur l'impossibilité de l'enseignement, mais bien sur leurs conditions de possibilité.

新たな問題として『教師論』の著作の構成について再検討が必要になるであらう。「記号論」と『内的教師論』に二分割し

て対立させる観方 (F. - J. Thonnard, G. Wijdervald, cf G. Madec, *Analyse du De Magistro, Revue des Etudes Augustiniennes*, vol. 21, 1975) 及び筆と調停し言葉の積極的な意義を見出す出せうとする観方 (R. H. Baker, A. K. Clark) を探るべきであらう。

尚、著作の構造分析、対話の様態、受肉した *Verbum* と *verba* との関係等の問題については稿を新たにしたい。

(本稿は第四二回教父研究会での口頭発表に基づくものである)